

# 蘇軾詩注解（二十八）

山本和義  
蔡毅  
中裕史  
中純子  
原直枝  
西岡淳

（南山読蘇会）

中国宋代の詩人蘇軾の以下の作品について注解を施す。括弧内の数字は東北大学中国文学研究室作成『蘇東坡詩作品表』による通し番号。

黄師是が兩浙の憲に赴くを送る（一九五三）

范中濟経略侍郎を送り、韻を分かちて詩を賦す。軾 先の字を得たり。且つ贈るに魚枕杯四つ・馬箠一つを以てす。「元戎十乘、以て先ず行を啓く」を以て韻と為す（一九五四）

呂与叔学士が挽詞（一九五六）

丹元子 詩を示す。飄飄然として謫仙が風氣有り。吳伝正 継いで作る。復た其の韻に次す（一九五七）  
王定国が丹元子が寧極齋に書するに次韻す（一九五八）

王仲至侍郎 稚栝を恵まる。之を礼曹の北垣の下に種う。今 百余日たり、蔚然として生意有り。喜びて詩を  
作る（一九五九）

錢穆父が馬上にて蔣穎叔に寄するに次韻す 二首（一九六〇・一九六一）

一九五三（施三三―三六）

送黃師是赴兩浙憲

黃師是が兩浙の憲に赴くを送る

1 世久無此士 世に久しく此の士無し

2 我晚得王孫 我れ晚に王孫を得たり

3 寧非叔度家 寧くんぞ叔度が家に非ざらん

4 豈出次公門 豈に次公が門に出づるか

5 白首沈下吏 白首 下吏に沈むに

6 綠衣有公言 綠衣 公言有り

7 哀哉吳越人 哀しい哉 吳越の人

8 久爲江湖吞 久しく江湖の呑むところと為る

9 官自倒帟屨 官 自ら帟屨を倒しまにして

10 飽不及黎元 飽くこと黎元に及ぼさず

- 11 近聞海上港 ちかき かいしやう かなたし  
 12 漸出水底村 あやみ すすい ちてい ぶら  
 13 願君五綺手 ねが けみ ごとこて  
 14 招此半菽魂 まね こ はんしゆく こん まね  
 15 一見刺史天 ひと みた せいし てん しみ  
 16 稍忠獄吏尊 やや ちゆう ぎく たい とうぞん  
 17 會稽入吾手 かいけい わが て  
 18 鏡湖小於盆 きやうこ ぼん  
 19 比我東來時 わが とうらい とき  
 20 無復瘡痕存 な へた しょうい ぞん
- 近ごろ聞く 海上の港  
 漸く水底の村を出だすと  
 願わくは 君 五綺の手  
 此の半菽の魂を招け  
 一たび刺史の天を見  
 稍や獄吏の尊きを忘れん  
 會稽 吾が手に入らば  
 鏡湖 盆よりも小さきならん  
 我が東來の時に比んで  
 復た瘡痕の存する無からん

元祐八年（一〇九三）、五十八歳の作。時に礼部尚書として汴京（開封）に在った。

○黄師是 黄寔のこと。師是はその字。陳州（河南省）の人。知瀛州、知定州などを歴任、在官中に卒して、龍圖閣直学士を贈られた。『宋史』卷三五四に伝がある。父の黄好謙は、蘇軾と同じく嘉祐二年（一〇五七）の進士。祖父の黄孝先は天聖二年（一〇二四）の進士で、その詩集について蘇軾が「黄子思が詩集の後に書す」（『蘇軾文集』卷六七）を書いてる。○兩浙憲 兩浙路提点刑獄公事のこと。兩浙路は地域名で、浙江省と長江以南の江蘇省を含む。提点刑獄公事は、各地方（路）の行政や風俗などを監察する。

2○王孫 王の子孫。黄寔の出自のよさをふまえていう。詩題の注を参照。3○叔度 後漢の黄憲のこと。叔度はその字。貧しい家に生まれ、父親は牛医であったが、憲はその高潔な人格から顔回の再来といわれた。周乗（子居）が黄憲を評して、「吾れ時月黄叔度を見ざれば、則ち鄙吝の心 已に復た生ず」と言ったことが知られる（『世説新語』

徳行篇)。孝廉に挙げられ、公府から招かれたが就かず、徴君と称された。4 ○次公 漢の黃霸のこと。次公はその字。漢の武帝・昭帝の代は刑罰が厳しかったが、黃霸は地方官として寛大な政治を行って名を挙げた。後に潁川太守から御史大夫などを歴て丞相となった。『漢書』の循吏伝に伝がある。5 6 ○白首・緑衣二句 周紫芝『竹坡詩話』に、「黃師是 浙の憲に赴くとき、東坡 之と姻家にして、置酒して其の行くを餞し、朝雲をして侍酒せしむ。坐間に詩を賦して、「緑衣 公言有り」の句有り。後人乃ち謂う、「緑衣の小官も、猶お其の留まらざるを惜しむ、是れ「公言有り」ならん」と。時に朝雲 師是に語りて曰く、「他の人は皆な進用せらるるも、而して君 数しば外に補せらるるは、何ぞや」と。是れをば公言と謂う。而して「緑衣」は、則ち東坡の朝雲を指せるなり」とある。緑衣は、妾の着物。『詩経』邶風「緑衣」に、「緑や衣や、緑衣黄裏」とあり、古注では、衛の莊公の正室莊姜が妾たちの僭上を憤った詩とする（この二句は、黄は原色で尊く、緑は中間色で卑しいのに、着物の表に緑が、裏に黄が用いられた、本末の転倒した状態をいう）。公言は、共通のことばの意だが、ここでは「私言」の対で、公論の意。韓愈「原道」「韓昌黎集」卷一一）に、「凡そ吾が所謂道德と云う者は、仁と義とを合わせて言うなり。天下の公言なり」とある。7 8 ○哀哉・久為二句 ここで述べられる当時の長江流域の水害については、元祐六年七月に書かれた、「封樁（朝廷の貯蔵庫名）に上供せる斛斛を將て浙西諸郡に応副して糶米を接統するを乞う劄子」（『蘇軾文集』卷三三）が参考になろう。「蘇・湖・常の三郡に水通じて一と為り、農民は丘墓に棲み、舟筏は市井を行き……」など、当時の惨状が述べられる。9 ○帑廩 帑は、かねぐら。廩は、こめぐら。韓愈「寶秀才に答うる書」（『韓昌黎集』卷一五）に、「猶お將に廩を倒しにし困を傾けて、羅列して進めんとす」とある。10 ○黎元 人民。たみくさ。『漢書』谷永伝に、「天下の黎元をして威な家を安んじ業を樂しみ……酷烈の吏を疾まざらしめば、唐堯の大災有りと雖も、民に上を離るる心無し」とある。以上の二句について、王注（趙次公）は、「詩意ノ言フココロハ、呉越ノ人 久シク水患ニ罹ヒ、官ハ財ヲ帑庫ニ費ヤシ、糧ヲ倉廩ニ費ヤセドモ、而シテ終ニ百姓ノ飢困ヲ救フ能ハザルナリ」という。11 12 ○近聞・漸出二句 この二句について一韓翃は、「今聞ケバ、呉越ノ間ノ海上ノ港（航路）ノ、マツ海ノ中ニナリテアル処ニ、水ガ退（イテ）漸クアソコハ、ドノ村デアアルナンドト云（フ）テ、村ガデキタト聞（キ）及（フ）ゾ」と記す（『四

河入海』卷二(二)。港は、航路、ふなみち。13〇五袴 五着のはかま。後漢の廉范(字は叔度)が蜀郡の太守となつたとき、民衆がその治績を称えて、「廉叔度、来ること何ぞ暮きや、……平生は襦無きも今は五袴(襦は肌着)とうたった故事にちなむ。「孔郎中が荆林の馬上にして寄せらるるに和す」詩の注(『蘇東坡詩集』第四冊一五一頁)を参照。14〇招此一句 半菽は、豆を半分混ぜた粗末な食べ物。「漢書」項籍伝に、「今、歳飢えて民貧しく、卒は半菽を食らう」とある。招魂は、疲弊や心労のために抜け出した魂を呼び返して、元気を取り戻させること(『楚辭』「招魂」の後漢・王逸の序)。15〇刺史天 『後漢書』蘇章伝に、「順帝の時、冀州刺史に遷る。故人 清河太守と為り、章部を行りて其の姦賊を案す。乃ち太守を請き、為に酒肴を設け、平生の好を陳べて甚だ歡ぶ。太守 喜びて曰く、「人には皆な一天有り、我は独り二天有り」と。章曰く、「今夕、蘇孺文の故人と飲む者は、私恩なり。明日、冀州刺史の事を案する者は、公法なり」と。遂に其の罪を挙正す」とある(孺文は蘇章の字)。16〇獄吏尊 漢の文帝の時、開国の功臣周勃が謀叛の疑いをかけられて逮捕された。申し開きのできない周勃を獄吏は侮辱したが、周勃に千金を贈られると、文帝の娘(周勃の長子の妻)を証人に立てるよう示唆した。これが功を奏し、外戚(薄氏)の力を借りて周勃は釈放され、爵位と領邑を回復した。このとき周勃は、「吾れ嘗て百万の軍を將いれども、然るに安くんぞ獄吏の尊きを知らんや」と言った(『史記』絳侯周勃世家)。1718〇会稽・鏡湖二句 会稽は浙江省の地名で、当時は越州会稽郡(今の紹興市)。鏡湖はその地の湖の名。この頃、蘇軾は越州太守を乞うているが、結局は許されなかった。『蘇軾年譜』下冊一〇九四頁、元祐八年六月甲寅(初八日)の条を参照。一韓智翹は、「坡(ガ)言(フココロ)ハ、我レ今 越(ヨ)乞(フ)程ニ、若シユルサレテ吾ガ手ニ入(リ)タラバ。其(ノ)時ハ、湖水毛泛濫セズ、水毛退(キ)テ、鏡湖毛益ヨリモ小(サ)キナルベキゾ」と記す。20〇瘡痍 えず。また、災害や戦争などによる損害のこと。ここでは、洪水による被害をいう。その被害も、兩浙路提点刑獄公事となる黄寔の治績によって消えていよう、との意を込める。『漢書』季布伝に、「今、瘡痍未だ瘳えざるに、(樊)噲 又た面諛して、天下を搖動せんと欲す」とある。併せて「章伝道が「雨を喜ぶ」に次韻す」詩の注(『蘇東坡詩集』第三冊五〇八頁)を参照。

世にこのような立派な人物が久しく出なかったが、晩年に及んで、ようやくこの高貴な血筋のお方とめぐり

逢えた。いったい徴君ちゆうくん黄叔度（憲）の末裔しゆんりだろうか、それとも循吏じゆんり黄次公（霸）の一族か。なのに白髪あたま  
 どのようにして下役のままなのかと、わが側妻そばめも天下の公論を口にする。

あわれ、呉越の人びとは久しく江湖の大水に呑み込まれて、お上が金倉と米倉を総ざらえにしても、民草た  
 ちに暮らしの復旧が行きわたらない。聞けば、近ごろ舟の通う海辺の辺りに、水没していた村が次第に姿を現  
 しているとか。

あなたがそこに赴任なさったら、民を憐れむ政治を布いて、飢えて息も絶え絶えの彼らを蘇よみがえらせてくださ  
 いますよう。民があなたのことを、慈悲深い知事殿とひとたび仰ぎ見れば、獄吏の権威を畏れる思いも少しは薄  
 れるでしょう。

そして私が会稽をみずから治めるころには、鏡湖は水も引いて、たらいよりも小さくなってしまいました。私  
 が東にやって来るときには、（あなたのお働きで）災害の跡はもう無くなっていることでしょう。

一九五四（施三三三七）

送范中濟經略侍郎分韻賦詩軾得先字且贈以魚枕杯四馬箠一以元戎十乘以先啓行為韻

范中濟はんちゆうせい經略けいりやく侍郎じりやう分韻賦詩軾得先字且贈以魚枕杯四馬箠一以元戎十乘以先啓行為韻  
 范中濟はんちゆうせい經略けいりやく侍郎じりやうを送り、韻を分かちて詩を賦す。軾先せんの字を得たり。且つ贈るに魚枕杯四つ・  
 馬箠一つを以てす。元戎げんじゆう十乘、以て先ず行を啓く」を以て韻と為す

1 梁李久樂禍 梁りやう・李り 久しく禍わざを樂ねがう

2 自焚豈非天 自みづから焚やくは 豈あに天てんに非あらずや

3 兩鼠鬪穴中 兩鼠りようそ 穴中けつちゆうに鬪たたかう

- 4 一勝亦偶然  
一つしょうもまた偶然なり
- 5 謀初要百慮  
ぼろしよひやくりよまもよう  
謀初 百慮を要すれば
- 6 善後乃萬全  
ぜんご すなのばんぜんなり  
善後 乃ち万全なり
- 7 廟堂選世將  
びやうどう せいしょうをえらぶ  
廟堂 世將を選ぶ
- 8 范氏真多賢  
はんし まことけんおおし  
范氏 真に賢多し
- 9 仁風被宿麥  
じんふう しゆくばくこうむ  
仁風 宿麥に被らしめて
- 10 綠浪搖秦川  
りよくろう しんせん  
綠浪 秦川に揺れん
- 11 號令聳毛羽  
ごうれい もうつそび  
号令 毛羽を聳やかしめ
- 12 先聲落虛弦  
せんせい きよげん  
先聲 虚弦に落ちん
- 13 我家天一方  
わがいえ てんいつぽう  
我家 家は天の一方
- 14 去路城西偏  
きまろ じまうせいへん  
去路 城西の西偏
- 15 投竿困障日  
さお とう しようじつ  
竿を投じて障日に困ぜん
- 16 賣劍行歸田  
けん うれてゆく くだん  
劍を売りて行くゆく帰田せん
- 17 贈君荊魚杯  
きみ けいぎょはいおくる  
君に荊の魚杯を贈り
- 18 副以蜀馬鞭  
そ せうまべん  
副うるに蜀の馬鞭を以てす
- 19 一醉可以起  
いつすい もつた  
一醉して以て起つ可し
- 20 母令祖生先  
そせい さき  
祖生をして先んぜしむる母かれ

元祐八年（一〇九三）、五十八歳の作。

○范中濟 范子奇のこと。中濟はその字。その家はもと五代十国の蜀に仕え、范仁恕は宰相となったが、范從龜のとき宋に入朝して右屯衛將軍となった。子奇の祖父の范雍は宋初の辺防に功績があり、子奇自身もまた知慶州（慶州は甘肅省の地名）としてよく辺境を守って、官は吏部侍郎に至った。『宋史』巻二八八に伝がある。○分韻「曾子固が越に倅たるを送って燕の字を得たり」の注（『蘇東坡詩集』第二冊一三頁）を参照。この時は、詩題に引く『詩経』の詩句の八字を各人が韻字として詩を作り、蘇軾は「先」の字（下平声一先の韻）を韻字としてこの詩を作った。○魚枕杯 魚の頭骨にある丁字形のものを用いて作った酒杯。「荊州 十首」その八の注（『蘇東坡詩集』第一冊一七〇頁）を参照。○馬箠 むち。馬を打つ竹のむち。○元戎二句 この二句は、北方の異民族を征伐して大功をあげることをうたった、『詩経』小雅（南有嘉魚之什）「六月」の一節。元戎は、大きな兵車。

12 ○梁李・自焚二句 梁氏と李氏は、西夏を代表する宗族。宋の元豊四年（一〇八二）、当時の国王毅宗に、河南の地を宋に返還するよう説いた將軍の李清が、毅宗の母である梁太后に殺され、これを機に太后が政權を握った。このことがもとで西夏の国内は乱れ、宋はこれに乗じて李憲を派遣して西夏を攻めたが、得る所なく帰った。二句はこの事件をふまえる。樂禍は、わざわいを願い樂しむ（『四河入海』の訓は「ワザワイヲネガフ」）。『春秋左氏伝』莊公二十二年に、「今 王子頽 歌舞して倦まざるは、禍を樂しむなり」とある。自焚は、自分の身を焼くこと。『春秋左氏伝』隱公四年に、「夫れ兵は猶お火のごときなり。戢めずんば、將に自ら焚けん」とある。○西鼠・一勝二句 前の二句と同じく、梁氏と李氏をめぐる西夏の紛争について述べる。西鼠の喩えは、『史記』廉頗藺相如列伝に、「秦韓を伐ち、闕与に軍す。王 廉頗を召して問うて曰く、「救うべきや不や」と。對えて曰く、「道 遠く險狭にして、救い難し」と。……又た召して趙奢に問う。奢 對えて曰く、「其の道 遠く險狭なること、之を譬うれば、猶お西鼠の穴中に闘うがごとし。將の勇なる者 勝たん」とある。5 ○課初 出だしをよく考える。6 ○善後 よい結果を得る。うまくけりをつける。『孫子』作戰篇に、「夫れ兵を鈍らせ銳を挫き、力を屈くし貨を殫くすときは、則ち諸侯 其の弊に乗じて起こる。智者有りとし雖も、其の後を善くすること能わず」とある。7 ○廟堂 朝廷。古くは天子が政事を祖先のみたまや（廟堂）に告げ、群臣にはかった。○世將 代々將軍をつとめたこと。また、その人。



「世よ将たり」とも訓ずる。『史記』李將軍列伝に、「天子以為えらく、李氏は世将なり、と。而して八百騎に将たりしむ」とある。范子奇の祖父が辺境守備に功績があったことについては、詩題の注を参照。9〇仁風 仁徳が風のようにあまねく遠くまで行きわたること。潘岳「賈誼の為に作りて陸機に贈る」詩(『文選』巻二四)に、「大管は天を統べ、仁風は遐く揚がる」とある。〇宿麦 年を越す麦。麦は秋に種をまき、その冬を越して翌年の夏に収穫する。「杭州の杜・戚・陳の三掾が官を罷めて郷に帰るを送る」詩の注(『蘇東坡詩集』第三冊二三七頁)を参照。10〇緑浪一句 柳宗元「黄鸝を聞く」詩(『柳河東集』巻四三)に、「目 千里を極むれば山河無く、麦芒 天に際わって青波を揺らす」とある。秦川は、陝西省に甘肅省の一部を加えた地域(戦国時代の秦の領域)の、川沿いの平地のこと。范子奇がこれから赴任するのが、西夏と対峙するこの一帯である。11〇号令 大声で命令する。『国語』越語上に、「越王勾踐 会稽の上に棲み、乃ち三軍に号令す」とある。〇毛羽 鳥の羽の意で、鳥類をいう。『淮南子』天文訓に、「毛羽ある者は飛行の類なり」とある。12〇先声 名声を先に(周匝に)伝える。『史記』淮陰侯列伝に、「兵には固より声を先にして実を後にする者有りとは、此の謂なり」とある。〇落虚弦 弓の名手更羸が、雁が飛んでいるの見て、魏王のために弓を射る音のみ(虚発)によって雁を落とした故事。雁は傷を負い群れを離れていたことを、更羸はその飛び方と鳴き声によって知ったという(『戦国策』楚策四)。「広陵にして三同舎に会す……、劉貞父」詩の注(『蘇東坡詩集』第二冊一五〇頁)を参照。13〇天一方 天の一方の果ての意で、遠く離れていること。蘇武「詩 四首」その四(『文選』巻二九)に、「良友も遠く離別すれば、各おの天の一方に在り」とある。14〇去路 蘇軾の故郷である蜀へ帰るみち。〇城西偏 范子奇の赴く慶州の西端。15〇投竿一句 杜牧「途中の一絶」(『樊川文集』巻四)に、「惆悵す 江湖 釣竿の手、却って西日を遮りて長安に向かうを」とある。この詩は、晩年の杜牧が湖州から長安に赴くときに作られたもので、この一句はそれを意識すると思はしい。一韓智翊は、「坡(ノ)言(フココロ)ハ、我レ江湖ノ釣竿ヲ投棄シテ、平生釣竿ノ手ヲ以テ、今、日ヲ障ヘテ在京シマワル程ニ、仕宦ニ困ズルゾ」(『四河入海』巻二二の二)と記す。16〇売劍一句 漢の龔遂が渤海太守となったとき、農民たちに佩びている刀劍を売って牛や子牛を買わせた故事(『漢書』龔遂伝)。「山村五絶」その二の注(『蘇東坡詩集』第二冊五〇七頁)を参照。1718〇贈君・

副以二句 詩題の注を参照。19〇一酔一句 韓愈「石処士の河陽の幕に赴くを送る」詩（『韓昌黎集』巻四）に、「去  
去 事 方に急、酒行らば以て起つ可し」とある。20〇母令一句 晉の祖逖と劉琨は、ともに北方の異民族を相手に  
戦った將軍で、若年の頃から友人かつライバルであった。祖逖が登用されると聞いた劉琨は、親しい人に手紙を書い  
て、「吾れ戈を枕にして旦を待ち、逆虜を梟せんことを志す。常に恐るらくは祖生の吾に先んじて鞭を著けんことを」  
といった（『晉書』劉琨伝。「虔州八境の図 八首」その五の注（『蘇東坡詩集』第四冊四四二頁）を参照。

（西夏の）梁氏と李氏は長らく禍を楽しんでいたのだから、我が身を滅ぼすのも天のしからしむるところ。  
二匹のネズミが穴の中で鬭って、どちらかが勝ったとしてもそれは偶然に過ぎない。

物事は初め十分にはかりごとをめぐらせておけば、後になって万全の結果を得ることができるといふものだ。  
このたび朝廷では、代々將軍をつとめた武門の方を（経略の任に）選んだが、その任が下った范家はまこと逸  
材を輩出する家柄。君の任地では、年を越した麦に仁徳の風が吹いて、晴れ渡った平原に緑色の実りの波が揺  
れることだろう。君の号令を聞けば、えびすどもはもうそれだけで鳥がおじけづくよう。君の名声を耳にしただ  
けで、更羸の弓弦の音で雁が落ちたように降るだろう。

我がふるさとはこの空の果ての蜀にあるから、そこへ行くには君の任地の西の端を通ることになる。このた  
びは釣り竿を棄てた手で目を遮りつつ、あくせくと都へ上ったが、いずれは剣など売り払ってそのふるさとに  
帰りたく思っている。

君には荊州の魚枕の杯を贈り、蜀の馬の鞭もお付けしよう。この杯で一杯やっっていざ出立なされよ。手柄を  
狙う他の武者たちにはくれぐれも先鞭を付けられぬように。

（担当 西岡 淳）

一九五六（施三三―三九）

呂與叔學士挽詞

呂與叔學士が挽詞

- 1 言中謀猷行中經  
言は謀猷に中り 行は経に中る
- 2 關西人物數清英  
關西の人物 清英を數う
- 3 欲過叔度留終日  
叔度に過つて終日留まらんと欲し
- 4 未識魯山空此生  
未だ魯山を識らず 此の生を空しゆうす
- 5 論議凋零三益友  
論議凋零す 三益友
- 6 功名分付二難兄  
功名分付す 二難兄
- 7 老來尙有憂時歎  
老來 尙お時を憂うる歎有り
- 8 此涕無從何處傾  
此の涕 從る無くんば何処にか傾けん

元祐八年（二〇九三）、五十八歳の作。

○呂与叔學士 呂与叔は、呂大臨（一〇四六〜九二二）のこと。与叔はその字。藍田（陝西省）の人。張載（張横渠一〇二〇〜七七）と程顥・程頤（二程 一〇三二〜八五、一〇三三〜一一〇七）に学び、謝良佐・游酢・楊時とともに「程門の四先生」と称された。六経のなかでもとりわけ礼学に通じていた。『宋史』卷三四〇に伝がある。元祐年間に太学博士となり、ついで秘書省正字となった。『夢溪筆談』卷二に「集賢院記に「開元的故事に、校書の官は許されて学士と称せらる」と。今、三館の職事、皆な学士と称せらるるは、開元的故事を用うるなり」とある。呂大臨は芸閣先生（芸閣は秘書省の別称）とも呼ばれ、晩年には秘書省正字であったことから、学士の称を用いたのである。

う。挽詞は、死者を弔う詩。葬礼の際に棺を挽く者がうたう歌を挽歌といい、漢の「薤露」「蒿里」がそのはじまりとされる。『文苑英華』卷三二〇「悲悼」に「挽歌八十六首」とあるなかに挽詞と題された作品も多く収録されており、挽詞は挽歌と同じ意味で用いられていると考えられる。呂与叔は元祐七年(一〇九二)の五月か六月に亡くなっており(孔凡礼『蘇軾年譜』下冊一〇八六頁)、本詩はその人を弔うために作られた。

1〇言中一句『論語』微子篇に「言は倫に中り、行は處りに中る」という逸民の柳下惠と少連への孔子の評語が借り用いられている。謀猷は、道に適った謀をいう。『尚書』文侯之命に「昭めて厥の辟に事え、越た小大の謀猷に、率從せざる罔し」とある。2〇関西一句 関西は函谷関以西の地をさし、人物とは、傑出した人材であることをいう。

ここでは藍田出身の呂大臨を称えている。清英は、朝廷で活躍するべき俊才をいう。『後漢書』辺讓伝に「議郎の蔡邕は深く之を敬い、以為えらく(「辺」讓は宜しく高位に処るべし」と。乃何進に薦めて曰く、「伏して惟うに、幕府初めて開き、博く清英を選ぶ……」とある。3〇叔度 後漢末の清流派の代表格である黄憲のこと、叔度はその字。『世説新語』德行篇に、清流派の一人郭泰が黄憲のところへ二晩も泊まった理由を述べて、「叔度は汪汪として万頃の陂の如し。之を澄ましても清まず、之を擾しても濁らず。其の器は深く広く測量し難きなり」と黄憲の人物を称えている。ここでは呂大臨を黄憲に擬えている。4〇未識一句 魯山は唐の元徳秀、字は紫芝、河南の人。魯山令になったことから魯山という。皮日休の「七愛詩 並びに序」(『全唐詩』卷六〇八)に「元魯山」を詠じて「吾れ愛す 元紫芝、清介なること伯夷の如し……吾れに魯山の道無く、空しく魯山の辞有り、恨む所は相識らざること、毫を授りて空しく涕垂る」とある。ここでは、呂大臨を元徳秀に擬えている。5〇論議一句 論議は、その人物がもつ認識や意見。『呂注』では議論に作るが、ここでは宋本に従う。『容齋三筆』卷六「賢士隱居者」の条に「其の容貌を望み、其の論議を聴き、聳然とせざるもの莫し」とある。凋零は、衰微していくこと、亡くなることもいう。白居易「夢得に代わりて吟ず」詩(『白居易集箋校』卷二五)に「後來は変化して三分は貴く、同輩は凋零して大半は無し」とある。三益友は、『論語』季子篇に「孔子曰く「益者三友、損者三友。直きを友とし、諒を友とし、多聞を友とするは、益なり」とあり、友とすべきは、剛直な人物、誠実な人物、博識な人物であることをいう。ここでは呂大臨

がそれを兼ね備えた友に値する人物であることをいう。6〇巧名一句『世説新語』德行篇の陳元方・陳季方兄弟がどちらも優れていることから、難兄難弟という。呂大臨は呂賁ふんの第四子であり、大忠（字は進伯）・大防（字は微仲）・大鈞（字は和叔）の三人の兄がいた。そのうち、大臨より前に死去した大鈞を除く、大忠・大防の二名を指して難兄というと考えられる（『宋史』巻三四〇の伝を参照）。8〇此涕一句 孔子が衛で喪祭に遭遇し、子貢に驂を贈るように命じた。子貢は弟子の喪祭よりも丁重ではないかと訝いぶかしがった。それに対して「夫子曰く「予 郷者に入りて之を哭せるとき、一哀に遇いて涕なみだを出だせり。予 夫の涕の従る無きを悪にくむなり。小子 之を行え」と」（『礼記』檀弓上）とある。

朝廷における献言は道に適かない、その行いは聖人の教えに沿うていた。関西の生んだ人物には俊英を多く数えあげることができる。黄叔度（のようなあなた）を訪ねてひねもす語りあかそうと思いつつ、元魯山（のようなあなた）と面識なきままにきてしまったこの人生はなんとむなしなものでしょう。

友とすべきあなたと論じあう夢はしぼんでしまいました。その功名はお二人の優れた兄上に分かち残されました。年老いてなお世の流れを愁い嘆かれたのです。私の流すこの涙が理由なきものならば、誰のために流すというのでしょうか（この涕はあなたのためにこそ流すのです）。

一九五七（施三三―四〇）

丹元子示詩飄飄然有謫仙風氣吳傳正繼作復次其韻

丹元子 詩を示す。飄飄然として謫仙が風氣有り。吳伝正 継いで作る。復た其の韻に次す

1 飛仙亦偶然

飛仙も亦た偶然

- 2 脫命瞬息中  
命を脱す 瞬息の中  
惟詩不可擬  
惟だ詩のみ擬う可からずして
- 3 如寫天日容  
天日の容を写すが如し
- 4 夢中哦七言  
夢の中に 七言を哦し
- 5 玉丹已入懷  
玉丹 已に懷に入る
- 6 一語遭綽虐  
一語 綽虐に遭いて
- 7 失身墮蓬萊  
身を失いて 蓬萊より墮つ
- 8 蓬萊至今空  
蓬萊は今に至るも空しゅうして
- 9 護短不養才  
短を護りて才を養わず
- 10 上界足官府  
上界は官府足く
- 11 謫仙應退休  
謫仙 応に退休すべし
- 12 可憐吳與蘇  
可憐れむ可し 吳と蘇と
- 13 骯髒雪滿頭  
骯髒にして 雪 頭に滿つ
- 14 雪滿頭  
雪 頭に滿つ
- 15 終當却與丹元子  
終に當に却つて 丹元子と与に
- 16 笑指東海乘桴浮  
笑いて東海を指して 桴に乗りて 浮ぶべし
- 17

元祐八年（一一〇九三）、五十八歳の作。

○丹元子 姚安世のこと。丹元姚先生とも呼ばれた（『蘇軾詩注解（二十六）』に収める作品番号一九三五・一九三六

の詩の注を参照)。姚氏の元の詩は伝わらない。○飄飄然 軽やかに世俗を超脱するさま。漢の武帝が司馬相如の「大人の賦」を見て、「天子大いに説び飄飄として凌雲の気有り、天地の間に遊ぶ意に似たり」（『史記』司馬相如伝）と称えた故事を丹元子の詩に用いている。○謫仙風気 仙人のような趣をもつこと。李白「酒に對つて賀監を憶う 二首 並びに序」（『李太白全集』巻三三）に「太子賓客賀公 長安紫極宮に於て、余を二見し、余を呼んで謫仙人と為す」とある。謫仙は、俗世に身をおく仙人のこと。○呉伝正 名は安詩。伝正はその字。「呉伝正が「枯木の歌」に次韻す」詩（『蘇軾詩注解』二二七）の詩題の注を参照。呉氏の詩も伝わらない。

1○飛仙 天空に飛翔する仙人のこと。蘇軾「孫職方が「蒼梧山」に次韻す」詩の注（『蘇東坡詩集』第三冊四一頁）を参照。2○脱命 命からがら逃げること。柳宗元「韋珩に寄す」詩（『柳河東集』巻四二）に「奇瘡 釘骨 状は箭の如く、鬼手より命を脱すること 織毫を争う」とある。一韓智翊の聞書に「脱命ト云（フ）ハ、天帝之勅命ヲチガヘテ亡命スルノ心ゾ」（『四河入海』巻一九の三）と記す。○瞬息中 一度まばたきし、ひと呼吸するほどの短い時間。蘇軾「都を出でて陳に来る。乗る所の船上に……」詩の注（『蘇東坡詩集』第二冊七一頁）を参照。34○惟詩・如写二句 天日容は、太陽や月の光のさまをいう。韓愈「淮西を平らぐ碑文を撰するを進むる表」（『韓昌黎集』巻三八）に「乾坤の容、日月の光、其の絵画すべからざるを知れり」とある。一韓智翊の聞書に「世間ノ人ノ詩語ノ様ニハナキ程ニ、世間ノ人ガ此（ノ）人ノ詩ニ相擬シテナラウベキ事ガカナワヌハ、天日容ヲナントモ写シガタキガ如キゾ」というのに従う。5〜10○夢中・玉丹・一語・失身・蓬萊・護短六句 これらはすべて韓愈「夢を記す」詩（『韓昌黎集』巻七）に「壯にして少きに非ざる者の七言を哦す、六字は常の語にして一字は難し。我れ指を以て白玉の丹を撮る、行ゆく且つ咄嚙し行ゆく詰盤す、口前に截断す 第二の句、綽虐として我を顧て顔歛はず、乃ち知んぬ 仙人の未だ賢聖ならずして、短を護り愚に憑りて我に敬するを邀む」とあるのを題材としている。一韓智翊の聞書は4句から12句までを指して「此（ノ）一段ハ韓退之ガ記夢詩ヲ用（イ）テ建立スルゾ。此ノ丹元之毛詩（二）依（リ）テ罪ヲ得テ、人間ニ謫墮セラレタゲナゾ。サル程に、言（フココロ）ハ、丹元子 夢中ニ七言詩ヲ作（リ）テ、天帝ノ前デノ事ナレバ、ソバニ在ル玉丹ヲ取（リ）テ懷ニ入（レ）テアリシガ、其ノ作（リ）シ」所ノ詩ニ、一語ヲアヤマリ

タル程二、言語道斷ノ曲事ト云(フ)テ、身ヲ失シテ蓬萊ヨリシテ、人間へ謫墮セラレタゲナゾ」と云うのに従う。哦については、『蘇軾全集校注』卷三六では「哦は吟唱(吟詠すること)」と解説される。ここではそれに従う。綽唐は、錢仲聯は疊韻の語で顔の表情を形容するという(『韓昌黎詩繫年集釈』卷六)。ここでは詩の一語をしくじったことにより窮地に陥った表情と解しておく。失身は、生命を失うこと。韓愈「進士策問 十三首」その一(『韓昌黎集』卷一四)に「『易』に於て則ち又た曰く「君密ならざれば則ち臣を失ひ、臣密ならざれば則ち身を失う……」」とある。蓬萊は、神仙が住むという伝説上の山をいう。ここでは仙界のこと。護短は、短所を擁護すること。『抱朴子』内篇卷一四(勤求)に「抱朴子曰く、「諸もろ虚名の道士は、既に善く詭詐を為し、以て學者を欺き、又た多く短を護り愚を匿して、不知を恥とす……」」とある。11○上界一句 天上にある仙人の世界にも多くの役所があり、すでに仙人たちがそれぞれ職務に就いていることをいう。蘇軾「廬山 五詠」「廬敖洞」の注(『蘇東坡詩集』第三冊四九五頁)を参照。12○退休 官を退くこと。(ここでは前句にみえる天界の役所勤めを辞めることをいう。14○抗讎 意気軒高で剛直なさま。『後漢書』趙壹伝に「伊優たるは北堂に上り、抗讎たるは門辺に倚る」とあり、その注に「抗讎は高亢、婢直の貌なり」とある。李白「魯郡の堯祠にて張十四の河北に遊ぶを送る」詩(『李太白全集』卷一七)に「猛虎尺草に伏し、藏ると雖も身を蔽い難し、張公子の如き有りて、抗讎にして風塵に在り」とある。○雪满头 白髪の老人であることをいう。白居易「微之を夢む」詩(『白居易集箋校』卷三五)に「君 泉下に埋もれて泥骨を銷す、我れ人間に寄せて 雪 頭に満つ」とある。17○笑指一句 『論語』公治長篇に「子曰く、道行われず、桴に乗りて海に浮かばん、我に従う者は、其れ由なるか」とある。(ここではその故事をユーモアを含めて用いている。東海は、ひろびろとした理想の境地に人をいざなう海。『荀子』正論篇に「語に曰く「浅きは与に深きを測るに足らず、愚は与に知を謀るに足らず、坎井の鼃は与に東海の樂しみを語るべからず」と」とある。

天空を自由に飛翔する仙人がはからずも、天帝の命に違ひあつたという間に俗世に逃げてこられた。ただその詩だけはまねることさえできない、まるで太陽や月の光を写すような出来栄であるから。



(丹元子) 夢に七言詩を吟じて、白玉丹をすでにせしめていたのに、たまたま一語をしくじったばかりに、仙界ではもう生きることができずに俗世へと堕ちてこられたのだ。

仙界では今もなお(丹元子のような詩才をもつ)人材はおらず、つまらぬ者もちあげ、才あるものを育てようとしなない。仙界の役所のポストも充足しており、地上に左遷された仙人は隠居なさるがよろしかろう。

憐れなのは呉さんと蘇さん、強情をはったまますでに髪は真っ白。髪は真っ白。とどのつまりは丹元子と一緒に、笑って東海に筏を浮かべて乗り出しましょう。

(担当 中 純子)

一九五八(施注三三―四一)

次韻王定國書丹元子寧極齋

王定國が丹元子が寧極齋に書するに次韻す

1 仙人與吾輩

仙人と吾が輩と

2 寓迹同一塵

跡を同一の塵に寓す

3 何曾五漿饋

何ぞ曾て五漿饋らん

4 但有爭蓆人

但だ蓆を争う人有り

5 寧極無常居

寧極 常の居無し

6 此齋自隨身

此の齋 自ら身に随う

7 人那識郗鑑

人 那ぞ郗鑑を識らん

- 8 天不留封倫 てん ほくりん とど 封倫を留めず
- 9 誤落世網中 あやま せもう うち おお 誤って世網の中に落ち
- 10 俗物愁我神 ぞくぶつ わが じんを うれ 俗物 我が神を愁えしむ
- 11 先生忽扣戸 せんせい たちま と たた 先生 忽ち戸を扣き
- 12 夜呼祁孔賓 よる きこうひん よぶ 夜 祁孔賓を呼ぶ
- 13 便欲隨子去 すなわ ししたか 便ち子に随って去らんと欲すれども
- 14 著書未絕麟 しよ あらわ いまだ りん 書を著して未だ麟に絶たず
- 15 願挂神虎冠 ねが じんこ かん 願わくは神虎に冠を掛けて
- 16 往卜飲馬鄰 ゆ いかば りん ぼく 往きて飲馬の隣に卜せん
- 17 王郎濯紈綺 おうろう かんき せん 王郎 紈綺を濯う
- 18 意與陋巷親 いこころ ろうこう した 意は陋巷と親し
- 19 南游苦不早 なんゆう へや 南游 早からざることを苦しむ
- 20 儻及蓴鱸新 ある じゆんろ たら 儻いは蓴鱸の新たなるに及ばん

元祐八年（一〇九三）、五十八歳の作。

○王定国 王鞏のこと。定国はその字。「顔復を送り兼ねて王鞏に寄す」詩の詩題の注（『蘇東坡詩集』第四冊二七八頁）を参照。王鞏のもととの詩は伝わらない。○丹元子 姚安世のことを指すか。「秦少游が韻に次ぎて、姚安世に贈る」詩の詩題の注および「丹元姚先生が韻に次ぐ二首」の詩題の注（いずれも『蘇軾詩注解（二十六）』）を参照。○寧極齋 姚丹元の住まい。住まいの名は、『莊子』膳性篇に「時命に当たらずして大いに天下に窮すれば、則ち根を深くし極を寧んじて待つ。此れ身を存するの道なり」とあるのに基づく。○宋本・王本では詩題の冒頭を「次王定国韻」

に作る。

1 2 ○仙人・寓跡二句 仙人は、姚丹元をいう。一塵は、韓愈「雜詩」（『韓昌黎集』卷五）に、「下に禹の九州を視れば、一塵 毫端に集まる」とある。「王晉卿が花栽を恵みて……」詩（『蘇軾詩注解（二）』）の注も参照。二句は、姚丹元が蘇軾と同じく微小な存在として同じ世界に身を置くことをいう。3 4 ○何曾・但有二句 『列子』臆性篇に、齊に出かけたが途中で引き返してきた理由を問われた列子は、「吾れ十漿にて食らうに、五漿は先ず饋る」と答えた。漿は飲み物売る店をいう。また同じ臆性篇に、沛に出かけた楊朱が老子の教えに従って傲然とした態度を改めたところ、「舎れる者 之と席を争えり」と、少しも遠慮をしなくなった。二句は、姚丹元がいつも謙虚な態度でいることをいう。5 ○無常居 定まった住まいがないこと。白居易「冀城北原の作」詩（『白居易集箋校』卷九）に、「古今 相待たず、朝市 常の居無し」とある。7 ○郗鑑 字は道徽。施注に『唐紀聞』を引いて、武威の段割が魏郡に行ったときに道人の孟期思を知り、ともに恒山に入ったところ、じつと室に籠って禅の修行をする老先生に引き合わされた。段が孟期思に老先生の名を問うたところ、孟は『晉書』郗鑑伝を取り出してきて段に読ませ、「老先生を識らんと欲するか、即ち郗大尉なり」と答えたという。『太平広記』卷二八にも記載がある。8 ○封倫 唐代の官僚、字の徳彝で知られる。太宗の時に尚書右僕射の地位にあった。太宗が魏徴の仁義の政治を行うべきであるという提言を容れようとする、封倫は反対意見を述べた。その後、太宗は魏徴の提言に基づいて天下をよく治めたが、封倫はすでにこの世を去っていて、その治世を見ることができなかった（『新唐書』魏徴伝）。「閻立本が職貢図」詩（『蘇軾詩注解（十八）』）の注を参照。杜牧「魏文貞に題す」詩（『樊川文集』卷三）に、「憐れむ可し 貞観太平の後、天の且く封徳彝を留めざることを」とある。9 ○誤落一句 仙界から誤って俗世間に落ちることをいう。陶淵明「園田の居に帰る 五首」その一（『陶淵明集』卷三）に、「誤って塵網の中に落ち、一たび去って十三年」とある。10 ○俗物一句 世俗の人のために憂いが生じることをいう。俗物は、『世説新語』排調篇に、「嵇・阮・山・劉 竹林に在りて酣飲す。王戎後れて往く。歩兵曰く、「俗物已に復た来りて人の意を敗る」とある。愁我神は、韓愈「暮れに河堤の上を行く」詩（『韓昌黎集』卷一）に、「衰草 黄雲に際わり、感歎して我が神を愁えしむ」とある。11 ○扣戸

戸をたたく。蘇軾は「南溪の南、竹林中に、新たに一茆堂を構う。……」詩（『蘇東坡詩集』第一冊五二〇頁）に、「応に逢うべし 緑毛の叟の、戸を叩きて 夜 簪を抽くに」と、仙人が夜に訪ねてきて戸をたたくことを詠じている。その注も参照。12〇 祁孔賓 祁嘉のこと。孔賓はその字。『晉書』祁嘉伝に、「少くして清貧なれども学を好む。年二十余のとき、夜 忽ち窓中に声有り呼ばわりて曰く、「祁孔賓、祁孔賓、隠れられよ、去来、隠れられよ、去来。人世を修飾するは、甚だ苦しくして諧う可からず。得る所は未だ毛銖（わすか）もあらず、喪う所は山崖の如し」と。旦にして逃れ去る」とある。14〇 著書一句 とりかかっている著作を中途でやめることはできないことをいう。『春秋左氏伝』哀公十四年に「春、西に狩して麟を得たり」とあり、杜預の注に「仲尼 周道の興らざるを傷み、嘉瑞の応無きに感ず。故に魯の『春秋』に因りて中興の教えを修め、筆を獲麟の一句に絶つ」とある。15〇 願挂一句 官を辞したいと願うことをいう。神虎は宮門の名。唐の初めに太祖の諱を避けて神虎を神武と改めた。一句は『南史』陶弘景伝に、朝服を脱いで神武門に掛け、表を上って禄を辞したとあるのを踏まえる。「袁公濟 劉景文の「介亭に登る」に和す。……」詩の注（『蘇東坡詩選』二五七頁）を参照。蘇軾は「范純父が涵星硯・月石風林屏詩に次韻す」詩（『蘇軾詩注解』（二十四））でもこの故事を用いている。その注も参照。16〇 往卜一句 姚丹元の郷里に帰って住まうことをいう。卜は、住まいの良し悪しをうらなうこと。ここでは住まいを定めることをいう。『春秋左氏伝』昭公三年の伝文に「且つ諺に曰く、「宅を是れ卜するに非ず、惟だ隣を是れ卜す」と」とある。飲馬は、王注に引く趙次公注に「蘇州に飲馬橋有り。丹元子は蓋し蘇州の人なり」という。17〇 王郎一句 王郎は王鞏をいう。蘇軾は「彭城に在りし日、定国と九日の会を為す……」詩（『蘇軾詩注解』（二十三））などでも、この呼び方を用いている。純はしろぎぬ。綺はあやぎぬ。純綺はまたそれを着た貴族などの子弟をいう。『漢書』敍伝に、「（班伯）出でて王・許の子弟と群れを為し、綺襦純袴の間に在れども、其れを好むに非ざるなり」とある。濯はあらうこと。王鞏は真宗の世の宰相王旦の孫で、高貴な生まれであるが、一句はそうした驕りや贅沢な気風を一掃していることをいう。18〇 陋巷 貧しい人びとの住まうところ。『論語』雍也篇に、「賢なるかな回や。一簞の食、一瓢の飲、陋巷に在り」とある。19〇 南游一句 南游は、南への旅にでること。ここでは、都開封から姚丹元の郷里の蘇州へ旅することをいうと解される。苦不早は、

李白「南陵 兒童に分かれて京に入る」詩（『李太白全集』巻一五）に、「万乘に遊説すること早からざりしに苦しむ、鞭を著け馬に跨またがって遠道わたを渉る」とある。20〇儻及一句 尊は、じゅんさい。鱸は、スズキ、あるいはナマズ的一种ともハゼの一種ともいう。尊も鱸も蘇州（呉）の名物。一句は、秋風が吹くと郷里の菰菜こもさい（まこもの芽）・蓴羹じゆんこう（じゅんさいのスープ）・鱸魚の膾なますを思い出したと称して官を辞して帰郷した張翰の故事（『晉書』張翰伝）を踏まえる。蘇軾は「戯れに呉江の三賢の画像に書す」三首の二（『蘇東坡詩集』第三冊三三三頁）や「呂昌朝が嘉州に知となるを送る」詩（『蘇軾詩注解』二〇）でも、この故事を用いている。これらの注も参照。

仙人どのはわたしどもと、同じちっぽけな世界の中におられます。列子のように五軒の店では飲み物を捧げられたこともなく、席を譲れと言ってくる者がいるほどです。

寧極と名付けた住まいに姚どのが常に住まいなさっているわけではなくて、この住まいの方が姚どののおられるところに付いてくるのです。郝鑑のような姚どののこのことを知る人がありましようや、天は封倫をこの世にいつまでも留めておきはしないからです。

わたしは誤って俗世の網の中に落ちて、俗物ばらのために心を乱される日々をおくっています。姚どのとはぬげに戸を叩いて、祁嘉に何者かが隠棲を促したように声をかけてくださいます。できることなら姚どのとともに去りたいとは思いますが、書きかけの書類を放り出すこともできません。いつの日にか神虎門に朝服と冠を掛けて、（姚どのの故郷）飲馬橋あたりに出かけて行ってお近くに住まうことができればと願うばかりです。王どののは高貴のお生まれをひけらかす素振りなどすこしもなさらず、下じもの者と親しく交わろうとしておられます。わたしも早く（姚どのの故郷の）南方への旅に出かけられたらと思っていて、じゅんさいや鱸魚の旬に間に合うことができたらもう言うことなしです。

（担当 中 裕史）

一九五九（施三三—四二）

王仲至侍郎見惠釋栝種之禮曹北垣下今百餘日矣蔚然有生意喜而作詩

王仲至侍郎 栝栝を恵まる。之を禮曹の北垣の下に種う。今百餘日たり、蔚然として生意有り。

喜びて詩を作る

- 1 翠栝東南美  
翠栝は東南の美
- 2 近生神嶽陰  
近ごろ神嶽の陰に生ず
- 3 惜哉不可致  
惜しい哉 致す可からず
- 4 霜根絡雲岑  
霜根 雲岑を絡う
- 5 仙風振高標  
仙風 高標を振るい
- 6 香實隕平林  
香実 平林に隕つ
- 7 偶隨樗櫟生  
偶たま樗櫟に随つて生じ
- 8 不爲樵牧侵  
樵、牧の侵すところと為らざ
- 9 忽驚黃茅嶺  
忽ち驚く 黃茅の嶺
- 10 稍出青玉鍼  
稍く青玉の鍼を出だすを
- 11 好事雖力取  
好事 力めて取ると雖も
- 12 王城少知音  
王城 知音すくなし
- 13 豈無換鷺手  
豈に換鷺の手 無からんや
- 14 但知覓來禽  
但だ來禽を覓むるを知るのみ

- 15 高懷獨夫子  
高懷なるは独り夫子のみ
- 16 一見捐囊金  
一たび見て囊金を捐つ
- 17 得之喜不寐  
之を得て喜んで寐ねず
- 18 贈我意殊深  
我に贈る 意 殊に深し

元祐八年（一〇九三）、五十八歳の作。

○王仲至 王欽臣のこと。仲至はその字。『蘇軾詩注解（一）』に収める作品番号一六〇二の詩の注を参照。この詩が作られた当時は工部侍郎の任に在った（『続資治通鑑長編』元祐八年正月己亥）。○稚栝 栝は、ビャクシン（ヒノキの一種）。稚栝は、その苗のこと。○礼曹 礼部をさす。曹は、役所やその部署のこと。この当時、蘇軾は礼部尚書の任に在った。○蔚然 草木のさかんに茂るさま。

1 ○東南美 『爾雅』 积地に、「東南の美なる者は、会稽の竹箭有り」とある。2 ○神嶽陰 神嶽は、衡山（湖南省）のこと。陰は、山の北側。『尚書』禹貢に、「荊より衡（山）の陽に及ぶは惟れ荊州、……厥の貢は羽と毛と齒と草と、惟れ金三品、朮と榦と栝と柏」とある。4 ○霜根 霜にうたれた根。杜甫「韋少府班に憑りて松樹子を見めて栽す」詩（『杜詩詳注』巻九）に、「存せんと欲す 老蓋千年の意、為に霜根数寸なるを見めて栽えしめよ」とある。○雲岑 雲のかかる高いみね。陶淵明「歸鳥」詩（『陶淵明集』巻二）に、「遠く八表に之き、近く雲の岑に憩う」とある。5 ○仙風 仙界に吹く風。『藝文類聚』巻二に引く沈約「風の賦に擬す」に、「此れ蓋し羽客の仙風なり」とある。○高標 高い枝。左思「蜀都の賦」（『文選』巻四）に、「羲和 道を峻岐に仮り、陽鳥 翼を高標に迴らす」とある。○平林 平地にある林。『詩経』大雅（生民之什）の「生民」に、「誕に之を平林に寘く、平林を伐るに会す」とある。7 ○樗櫟 樗・櫟ともに使い道がない樹木で、伐る人がないので大木になるまで育つ。役に立たないものたとえに用いられるが、『莊子』では、役に立たぬがゆえに「無用の用」を備えたとされる。樗については『莊子』逍遙遊篇の莊子と恵子の対話に見え、櫟については人間世篇の匠石とその弟子との対話に見える。9 ○黄茅嶺 蘇軾は詩のな

かでしばしば「黄茅岡」(冬枯れのチガヤにおおわれた丘陵地)という表現を用いる。「颯口を出でて初めて淮山を見る。是の日、寿州に至る」詩『蘇東坡詩集』第二冊一二三頁、「常山を祭つて、回つて小獵す」詩『蘇東坡詩集』第三冊五八八頁)を参照。ここでは「黄茅嶺」と言うが、6句に「香実 平林に隕つ」とあることも併せて考えれば、場所としては険峻な山嶺というよりも、比較的なだらかな丘陵地のようなところをさすと解すべきだろう。12〇 王城 みやこ。天子の居城。ここでは開封をさすと解される。『春秋』昭公二十二年に、「秋、劉子・单子・王猛を以て王城に入る」とある。〇知音 自分の心を深く理解してくれる人。もとは音楽を理解する者の意で、春秋時代の琴の名手俞伯牙の演奏を鍾子期は見事に聞き分け、琴を弾く伯牙の意中にあるところ(山水)を必ず言い当てたという(『列子』湯問篇)。13〇換鶯 ガチョウ好きであった管の王羲之が、ガチョウをよく育てる道士の求めに応じて、『老子道德経』一卷を筆写してガチョウと交換した故事(『晉書』王羲之伝)。「蘇軾詩注解(十)」に収める、作品番号一七三六「錢道士が越守穆父と酒を飲すと聞きて二壺を送る」詩の注を参照。14〇来禽 リングの異称。王羲之の筆跡の一つに、冒頭が「青李・来禽・桜桃……」で始まる、「来禽帖」と呼ばれる書簡文がある。王羲之に由来する13句の「換鶯」の語に関連つけて用いられる。「次韻して舒教授が余の蔵する所の墨を観るに答う」詩の注(『蘇東坡詩集』第四冊六三四頁)を参照。以上の二句について、一韓智翹は「言(フココロ)ハ、今世間二王羲之ガ如クナル手カキ、ナイデハナケレドモ、皆(ナ)只(ダ)ニ口ニクウ青李来禽ナンドノミ求(メ)テ、此(ノ)栝ナンドヲ文字ヲウツクシウカイテ、換(ヘ)テトルヤウナル人ハナイゾ」と記す(『四河入海』卷一三四)。15〇高懷 高く深い胸のうち。杜甫「鄭十八賁に贈る」詩(『杜詩詳注』卷二四)に、「高懷 物理を見る、識者 安くんぞ肯て笑わん」とある。16〇捐囊金 財布の中のお金をはたき尽くす。囊は、財布。「潞公の「超然台」に和して次韻す」詩の注(『蘇東坡詩集』第四冊七八頁)を参照。

ああおと繁るビヤクシンは東南に産する美しい木で、近ごろ神嶽衡山の北の山かげにその木が生えた。惜しいことに下界におろして来ることはできずに、霜にうたれたその根を雲かかる峰にからませている。仙界に



吹く風がその高い枝を揺らして、香しい実を（少し離れた）山ふもとの林に落としたが、使いだのない樗や櫟の木とたまたま一緒に育ったのが幸いして、木こりや牧童らに損なわれることもなかった。

ふと見れば黄色く枯れたチガヤにおおわれた丘陵に、青い玉でできた針のような芽が育っているではないか。けれども好事家が苦勞してそれを運んできたって、都にはその木のよさを分かる者などいるはずがない。ガチョウと自分の書を取り換えた王羲之のような物好きがいらないわけではないけれど、みな来禽のような実のあるものを欲しがってばかりなのだ。そのなかで高潔な心をお持ちのあなただけが、この木をひと目見るなり財布をはき尽くされた。かくして手に入れたうれしきで夜もお眠りになれぬほどであったらうに、それを私に贈られたあなたのお志はことに深い。

- 19 公堂開後閣  
 公堂 後閣を開き  
 凡木 華簪に愧ず  
 一寸の根を栽培して  
 子<sup>し</sup>が百年<sup>ひゃくねん</sup>の心<sup>こころ</sup>を寄<sup>よ</sup>す  
 常に<sup>つね</sup>恐<sup>おそ</sup>る 樊籠<sup>はんろう</sup>の中<sup>うち</sup>  
 我<sup>わ</sup>が鸞鶴<sup>らんかく</sup>の襟<sup>えり</sup>を摧<sup>くだ</sup>かんことを  
 誰<sup>たれ</sup>か知<sup>し</sup>る 積雨<sup>せきう</sup>の後<sup>のち</sup>  
 寒芒<sup>かんぼう</sup> 曉<sup>あかつき</sup>に森森<sup>しんしん</sup>たらんとは  
 恨<sup>うら</sup>むらくは我<sup>わ</sup>れ歸老<sup>きらう</sup>に迫<sup>せま</sup>りて  
 汝<sup>なんじ</sup>が十尋<sup>じゅうゆん</sup>なるを見<sup>み</sup>ざらんことを
- 20 公堂開後閣  
 凡木 華簪に愧ず  
 一寸の根を栽培して  
 子<sup>し</sup>が百年<sup>ひゃくねん</sup>の心<sup>こころ</sup>を寄<sup>よ</sup>す  
 常に<sup>つね</sup>恐<sup>おそ</sup>る 樊籠<sup>はんろう</sup>の中<sup>うち</sup>  
 我<sup>わ</sup>が鸞鶴<sup>らんかく</sup>の襟<sup>えり</sup>を摧<sup>くだ</sup>かんことを  
 誰<sup>たれ</sup>か知<sup>し</sup>る 積雨<sup>せきう</sup>の後<sup>のち</sup>  
 寒芒<sup>かんぼう</sup> 曉<sup>あかつき</sup>に森森<sup>しんしん</sup>たらんとは  
 恨<sup>うら</sup>むらくは我<sup>わ</sup>れ歸老<sup>きらう</sup>に迫<sup>せま</sup>りて  
 汝<sup>なんじ</sup>が十尋<sup>じゅうゆん</sup>なるを見<sup>み</sup>ざらんことを
- 21 栽培一寸根  
 一寸の根を栽培して  
 子<sup>し</sup>が百年<sup>ひゃくねん</sup>の心<sup>こころ</sup>を寄<sup>よ</sup>す  
 常に<sup>つね</sup>恐<sup>おそ</sup>る 樊籠<sup>はんろう</sup>の中<sup>うち</sup>  
 我<sup>わ</sup>が鸞鶴<sup>らんかく</sup>の襟<sup>えり</sup>を摧<sup>くだ</sup>かんことを  
 誰<sup>たれ</sup>か知<sup>し</sup>る 積雨<sup>せきう</sup>の後<sup>のち</sup>  
 寒芒<sup>かんぼう</sup> 曉<sup>あかつき</sup>に森森<sup>しんしん</sup>たらんとは  
 恨<sup>うら</sup>むらくは我<sup>わ</sup>れ歸老<sup>きらう</sup>に迫<sup>せま</sup>りて  
 汝<sup>なんじ</sup>が十尋<sup>じゅうゆん</sup>なるを見<sup>み</sup>ざらんことを
- 22 寄子百年心  
 子<sup>し</sup>が百年<sup>ひゃくねん</sup>の心<sup>こころ</sup>を寄<sup>よ</sup>す  
 常に<sup>つね</sup>恐<sup>おそ</sup>る 樊籠<sup>はんろう</sup>の中<sup>うち</sup>  
 我<sup>わ</sup>が鸞鶴<sup>らんかく</sup>の襟<sup>えり</sup>を摧<sup>くだ</sup>かんことを  
 誰<sup>たれ</sup>か知<sup>し</sup>る 積雨<sup>せきう</sup>の後<sup>のち</sup>  
 寒芒<sup>かんぼう</sup> 曉<sup>あかつき</sup>に森森<sup>しんしん</sup>たらんとは  
 恨<sup>うら</sup>むらくは我<sup>わ</sup>れ歸老<sup>きらう</sup>に迫<sup>せま</sup>りて  
 汝<sup>なんじ</sup>が十尋<sup>じゅうゆん</sup>なるを見<sup>み</sup>ざらんことを
- 23 常恐樊籠中  
 常に<sup>つね</sup>恐<sup>おそ</sup>る 樊籠<sup>はんろう</sup>の中<sup>うち</sup>  
 我<sup>わ</sup>が鸞鶴<sup>らんかく</sup>の襟<sup>えり</sup>を摧<sup>くだ</sup>かんことを  
 誰<sup>たれ</sup>か知<sup>し</sup>る 積雨<sup>せきう</sup>の後<sup>のち</sup>  
 寒芒<sup>かんぼう</sup> 曉<sup>あかつき</sup>に森森<sup>しんしん</sup>たらんとは  
 恨<sup>うら</sup>むらくは我<sup>わ</sup>れ歸老<sup>きらう</sup>に迫<sup>せま</sup>りて  
 汝<sup>なんじ</sup>が十尋<sup>じゅうゆん</sup>なるを見<sup>み</sup>ざらんことを
- 24 摧我鸞鶴襟  
 我<sup>わ</sup>が鸞鶴<sup>らんかく</sup>の襟<sup>えり</sup>を摧<sup>くだ</sup>かんことを  
 誰<sup>たれ</sup>か知<sup>し</sup>る 積雨<sup>せきう</sup>の後<sup>のち</sup>  
 寒芒<sup>かんぼう</sup> 曉<sup>あかつき</sup>に森森<sup>しんしん</sup>たらんとは  
 恨<sup>うら</sup>むらくは我<sup>わ</sup>れ歸老<sup>きらう</sup>に迫<sup>せま</sup>りて  
 汝<sup>なんじ</sup>が十尋<sup>じゅうゆん</sup>なるを見<sup>み</sup>ざらんことを
- 25 誰知積雨後  
 誰<sup>たれ</sup>か知<sup>し</sup>る 積雨<sup>せきう</sup>の後<sup>のち</sup>  
 寒芒<sup>かんぼう</sup> 曉<sup>あかつき</sup>に森森<sup>しんしん</sup>たらんとは  
 恨<sup>うら</sup>むらくは我<sup>わ</sup>れ歸老<sup>きらう</sup>に迫<sup>せま</sup>りて  
 汝<sup>なんじ</sup>が十尋<sup>じゅうゆん</sup>なるを見<sup>み</sup>ざらんことを
- 26 寒芒曉森森  
 寒芒<sup>かんぼう</sup> 曉<sup>あかつき</sup>に森森<sup>しんしん</sup>たらんとは  
 恨<sup>うら</sup>むらくは我<sup>わ</sup>れ歸老<sup>きらう</sup>に迫<sup>せま</sup>りて  
 汝<sup>なんじ</sup>が十尋<sup>じゅうゆん</sup>なるを見<sup>み</sup>ざらんことを
- 27 恨我迫歸老  
 恨<sup>うら</sup>むらくは我<sup>わ</sup>れ歸老<sup>きらう</sup>に迫<sup>せま</sup>りて  
 汝<sup>なんじ</sup>が十尋<sup>じゅうゆん</sup>なるを見<sup>み</sup>ざらんことを
- 28 不見汝十尋  
 汝<sup>なんじ</sup>が十尋<sup>じゅうゆん</sup>なるを見<sup>み</sup>ざらんことを

29 蒼皮護玉骨

蒼皮そうひ 玉骨ぎよつこつを護り

30 旦暮視古今

旦暮たんぼ 古今ここんを視ん

31 何人風雨夜

何人なんびとか 風雨ふううの夜よる

32 臥聽飢龍吟

臥がして飢龍きりようの吟ぎんを聴きかん

19○公堂 役所の建物。賈島「姚合校書に酬ゆ」詩（『賈浪仙長江集』卷六）に、「公堂 朝に共に到り、私第 夜に相留む」とある。ここでは特に朝廷の高官が集う場をさす。○後閣 建物の後ろにあるくぐり戸。引いて、通用門。「蘇州の太守王規父が太夫人に侍して燈を觀るの仕に和す。……」詩の注（『蘇東坡詩集』第三冊二七七頁）を参照。合注をはじめ諸本は閣の字を閣に作るが、宋本施注に従う。20○凡木 ありふれた樹木。○華簪 冠をとめる立派なかんざし。引いて、高位高官およびその地位をさす。陶淵明「郭主簿に和す 二首」その一（『陶淵明集』卷二）に、「此の事 真に復た樂し、聊か用て華簪を忘る」とある。23○樊籠 鳥や獸をいれるおりやかご。また、自由を束縛するもの。陶淵明「園田の居に帰る 五首」その一（『陶淵明集』卷二）に、「久しく樊籠の裏に在りしも、復た自然に返るを得たり」とある。24○摧我一句 鸞は神鳥の名で、鳳凰の一種。鶴とともに仙人の乗る鳥とされる。『樂府詩集』卷五八に引く、南朝宋・湯休恵「楚の明妃の曲」に、「鸞鶴に駢駕し、仙靈を往来す」とある。襟は着物のえりのことだが、『詩経』鄭風「子衿」に、「青青たる子が衿、悠悠たる我が心（衿は襟と同音）とあり、ピヤクシンの若木の緑のさまと、若いがゆえに順調に育たないかもしれないという心配とが、この語に込められるようである。また、この二句には、いわゆる鸞鏡（孤鸞照鏡）の故事も響いている可能性がある。むかし罽賓王（罽賓はインドのカシミール地方にあった国名）が一羽の鸞鳥を捕らえたが、決して鳴こうとしなかった。そこで王は金のカゴ（金罽）に鸞鳥を入れて豪華な食物を与え続けたが、悲しげな様子で鳴かぬままに三年が過ぎた。そこで夫人が「鏡を見せれば、仲間だと思って鳴くのではないか」と言ったため、その通りにしたところ、天に届かんばかりの悲鳴をあげ、ひとたび羽ばたいて絶命した（『太平御覽』卷九一六に引く南朝宋・范泰「鸞鳥詩の序」）。26○寒芒 雨に濡れてまだ

冷たい芽。芒は、穀物や葉先の細毛のことだが、ここではビヤクシンの芽をさす。○森森 盛んにしげるさま。「臨安の令、宗人そうじん同年と劇飲す」詩の注『蘇東坡詩集』第二冊五五〇頁を参照。28〇十尋 十抱とおかえ。尋は長さの単位で、両手を左右に伸ばした長さ。29〇蒼皮 樹木の木皮が、年月を経て古びたさまを呈していること。「宿州しゅうしゅうにして劉涇りゅうけいに次韻す」詩の注『蘇東坡詩集』第四冊二二八頁を参照。○玉骨 玉でできた骨。気性が高潔ですぐれていることをいう。杜甫「徐卿じょけいの二子の歌」(『杜詩詳注』卷七)に、「大兒だいじは九齡きゅうれい 色せいろ清徹しやうてつ 秋水しゅうすいを神しんと為なし玉を骨と為す」とある。30〇旦暮 朝あさから暮ゆふれまで。短い時間のこと。『史記』魏公子列伝に、「吾れ趙を攻め、旦暮まさ且まに下さんとす」とある。この句について一韓智翹は、「サテ此(ノ) 栝くわつ 寿しゅう ウシテ、古今ヲモ旦暮ト視(ル) ベキゾ」と記す。3132〇何人・臥聽二句 杜甫「瀟瀟せうせう」詩(『杜詩詳注』卷一九)に、「江天 漠漠ぼくぼく 鳥ちどり双ふたび去り、風雨 時時 龍りゅう一吟いんす」とある。樹木ではしばしば松が龍に喩えられるが(『蘇軾詩注解』(二十三)所収の「予 少年なりしとき、頗る松を植うるを知る……」詩の注を参照、たとえば「塩官絶句 四首、塔前たかの古檜こけい」(『蘇東坡詩集』第二冊三九七頁)では、ビヤクシンの類を龍に見立てている。なお、この二句は、礼部尚書および翰林学士として、宿直の勤務があった蘇軾の立場をふまえたもの。

(この木を植える場所は) 朝廷の殿堂裏うちらに設けた通用門の近くにしよう。月並みな木では(そこを通る) 高官たちに恥ずかしいというものだ。一寸ばかりのビヤクシンの根を植えて養い、そこに百年先までも思いやるあなたの心を託す。でも宮中に植えられれば籠にとらわれた鳥のようなものだから、将来は仙界に育つであろうこの木の持ち前が傷つかないかと心配だった。それが、あにはからんや、降り続いた雨があがると、その芽がまだ雨露を帯びたままで、朝の光を浴びてずらりと顔を出していようとは。

残念だが私には老いて退隱する日が迫っているから、おまえが幹周りに十抱えの大木にまで育つのを見られはしないが、その頃には蒼あおとした樹皮が気高い骨格を護っていて、おまえは人の世の古今を旦暮のうちに見ているだろう。その時には、風雨の夜におまえが立てる飢えた龍の如きうなり声を、いったいどんな人が宿直

して寝ながら聴くのだろうか。

一九六〇・一九六一（施三三・四三・四四）

次韻錢穆父馬上市蔣穎叔二首

一 錢穆父が馬上にて蔣穎叔に寄するに次韻す 二首

一九六〇（施三三・四三）

その一

- 1 玉關不用一丸泥 ぎよつかん もち いちがん どろ
- 2 自有長城鳥鼠西 おのすかちようじゆうあ ちようそ ちようそ
- 3 剩與故人尋土物 あまっさ こじん たぬめ どぶつ たず
- 4 臘槽紅麴寄駝蹄 ろうぞう こうぎく たてい よ

元祐八年（一〇九三）、五十八歳の作。

○錢穆父 錢勰のこと。穆父はその字。『蘇軾詩注解（三）』に収める作品番号一六一六の詩の注を参照。この時は知開封府の任に在った（『統資治通鑑長編』元祐八年五月甲午）。○蔣穎叔 蔣之奇のこと。穎叔はその字。『蘇軾詩注解（二十四）』に収める作品番号一九〇六の詩の注を参照。蔣之奇が知熙州（熙州は甘肅省にあり、当時は西夏の支配地と境を接していた）に任じられたことについては、『蘇軾詩注解（二十六）』に収める作品番号一九三一の詩の注、および『蘇軾詩注解（二十七）』に収める作品番号一九四五の詩を参照。なお、錢勰の元の詩（七言絶句二首）が、

秦觀の「省を出でて馬上に 穎叔を懐うこと有るに次韻す」(『淮海集』卷二)と題する二首の詩に付されて伝わる。1〇玉関 玉門関のこと。『後漢書』班超伝に、「臣 敢えて酒泉郡に到るを望まず、但だ願うらくは生きて玉門関に入らんことを」とあり、注に「玉門関は敦煌郡に属す、今の沙州なり。長安を去ること三千六百里、関は敦煌県の西北に在り」とある。庾信「王琳に寄す」詩(『庾子山集』卷四)に、「玉関 道路遠く、金陵 信使疏なり」とある。〇一丸泥 一握りの泥。わずかな努力で險要の地をよく守ることに喩える。『後漢書』隗囂伝に、「元請うらくは、一丸の泥を以て大王の爲に東のかた函谷関を封ぜん、此れ万世の一時なり」とある(元は、隗囂の将王元)。2〇長城国を守る力を備えたものの喩え。『宋書』檀道濟伝に、「道濟収めらるるや、幘を脱ぎて地に投じて曰く、「乃ち復た汝が万里の長城を壊せり」と」とある。〇鳥鼠 甘肅省の山の名。『尚書』禹貢に「西傾と朱圉と鳥鼠より、太華に至る」とある。この当時は渭州渭源県に属し(『太平寰宇記』卷一五一)、之奇が赴任する熙州はその西方にあたる。3〇土物 その土地の産物。特産物。『後漢書』西域伝の論贊に、「遯ぎかな西胡、天の外区なり、土物琛麗、人性淫虚」とある。4〇臘糟 臘酒(陰曆十二月に醸す酒)を作るときにできる酒粕。〇紅麴 麴の一種。赤紅色で、食品の材料または薬用にする。『初学記』卷二六に引く王粲「七积」に、「瓜州の紅麴、糝に参うること相半ばせば、柔滑膏潤、口に入りて流散す」とある。〇駝蹄 ラクダの蹄の肉。杜甫「京自り奉先県に赴き、懐いを詠ず、五百字」(『杜詩詳注』卷四)に、「客に勸む 駝蹄の羹、霜橙 香橘を圧す」とある。なお、この句については、元・耶律楚材「蒲察元帥に贈る 七首」その四(『湛然居士文集』卷五)に、「春薤 旋ち澆ぐ 濃やかなる鹿尾、臘糟 微かに浸す 軟らかなる駝蹄」が参考となろう。

玉門関を塞ぐためには一握りの泥さえも要りはしない。鳥鼠山の西方に、君が「長城」としてあるのだから。あとは友人のために向こうの土地の名物を採ってくればよい。臘酒の酒粕に紅麴 ラクダの蹄肉を送ってくれたまえ。

一九六一（施三三四四）

三〇

その二

- 1 多買黃封作洗泥 多く黄封を買いて泥を洗うを作さん
- 2 使君來自隴山西 使君 来たること隴山の西自りす
- 3 高才得兔人人羨 高才 兔を得れば人人羨む
- 4 爭欲尋蹤覓舊蹄 争って蹤を尋ねて旧蹄を覓めんと欲す

1○黄封 酒のこと。宋代の官制の酒は、黄色の紙または絹で容器の口を封じた。○洗泥 旅塵を洗う意（俗語）で、宴を開いて遠来の客を慰勞すること。2○使君 天子の使者の意で、州・郡の長官のこと。ここでは、知熙州の任に就く蔣之奇をさす。○隴山 今の陝西省と甘肅省の間にある高峻な山岳地帯のこと。隴坂、隴首とも称する。『太平寰宇記』（卷三二）隴州汧源県「隴山」の項を参照。3 4○高才・争欲二句 『莊子』外物篇に、「蹄は兔を在るる所以なり、兔を得て蹄を忘る」（蹄は、兔を捕らえる畏）とある。

帰った時には黄封の美酒をふんだんに買いいおいて旅の疲れを癒してあげよう。何しろ使者どのは遙か隴山の西から帰還になるのだから。能力すぐれた者がすばしい兔を狩ってしまつてから、皆はそれを羨んで、争つて兔が走つた跡をたどつて、古いわなをさがそうとしても後の祭りだ。

（担当 西岡 淳）